

広報つばめ

Tsubame ➡

2025
10
No.414

若き煙管職人の挑戦

特集：人を惹きつける、燕のひものづくりの魅力とは

■市の情報を SNS でも配信中！
燕市公式 X・LINE の登録はこちら



© 新潟県燕市

— 燕のもののづくりの歴史をふりかえる —

時代	主なできごと
江戸時代初期	■和釘作り始まる 農家の副業として和釘を製造、金属産業の原点
1701 年 (元禄 14 年)	■間瀬銅山開鉱 良質な銅が産出し、燕の金属加工を支える
1736～41 年 (元文年間)	■ヤスリ作り始まる 会津や地元職人により技術伝来
1764～72 年 (天明年間)	■鋳起銅器技術伝来 仙台から会津を経て燕に伝わる
1764～72 年 (明和年間)～1776 年 (安永 5 年)	■煙管作り広まる かざり職人らが江戸・会津より技術を伝える
江戸時代中期	■彫金技術伝来 江戸・会津から伝わるが詳細不明
明治時代	■和釘の衰退 洋釘の普及で和釘産業は大打撃
1885 年 (明治 18 年)	■会津から彫金師が燕に移住し技術を定着
1911 年 (明治 44 年)	■金属洋食器の初受注 鋳起銅器技術を応用し手作りで製造
1918 年 (大正 7 年)	■煙管の型作り成功 燕は日本一の煙管産地となる
1920 年 (大正 9 年)	■間瀬銅山閉山 金属洋食器製造の機械化が進展 電力導入で量産化、輸出も拡大
1929 年 (昭和 4 年)	■世界恐慌の打撃 東南アジアに新たな販路を開拓し、グローバル化を実践
1930 年代	■真鍮・銅・アルミ製品生産 金属ハウスウェア産業が成立
1941 年 (昭和 16 年)	■戦時体制で金属洋食器禁止 国家総動員法で軍需産業へ転換
戦中～戦後	■紙巻きたばこの普及により煙管産業衰退
1946 年 (昭和 21 年)	■アメリカの進駐軍から金属洋食器の大量受注 金属洋食器製造で戦後復興の大きな転機
1965 年 (昭和 40 年) 頃	■「燕通い」通勤ラッシュ 燕駅の一日の平均乗降客数が 17,000 人以上に。市内に約 1,200 の工場が操業し活況をみせる
1970 年代	■輸出減退と国内開拓 貿易摩擦を機に新素材導入など模索
1971 年 (昭和 46 年)～ 1980 年代	■円高進行と新分野開拓 自動車部品・医療器具などへ拡大
1980 年代以降	■新興国の台頭 新興国の製品に市場を圧迫され始める
2013 年 (平成 25 年)	■燕三条 工場の祭典初開催 ものづくり現場を一般公開する産業観光イベントの始まり
現在	■精密加工・難素材分野へ チタンやマグネシウムなどを扱い独自性強化

400 年続く燕のもののづくり。時代の変化に合わせて新たな挑戦を重ねながら、今に受け継がれています。

和釘から始まったものづくりの歩み

江戸時代、農家の副業として始まった和釘づくりが、金属加工の聖地となる、このまの産業の礎を築きました。その後、暮らしの道具として鋳起銅器が作られ、明治・大正時代には、金属洋食器や煙管の機械化による大量生産を行うようになりました。燕の

ものづくり産業は、手仕事中心の時代から蓄積してきた技術を応用・転用し、未知の分野にも順応してきました。また、地域内で関連する工程を分業体制で行っていたことで、社会情勢に合わせた事業転換も可能となり、多様化した金属加工を中心とした技術は、世界に誇る「ものづくりのまち・燕」を形成し、今日の燕のもののづくりを支えています。

日本一の産地となった煙管の歴史

煙管は日本の暮らしの中に憩いとくつろぎを与える小道具として、親しまれてきました。煙管の製造が燕市で始まったのは、江戸中期に会津（福島県）と江戸からその技術が伝わったことがきっかけとされています。そして、も

技術が一体となって発達し、大正時代に機械化による量産に成功したことで、燕市は日本一の煙管産地となりました。しかし戦後、紙巻きたばこの普及で衰退。それでも、手仕事による煙管制作は現代まで受け継がれてきました。そして、煙管産業で培われた研磨やプレスといった技術は、燕の金属加工の基盤となり、今に息づいています。



人を惹きつける、燕のもののづくりの魅力とは

燕との出会いと移住の決意

燕に移住した若き煙管職人

今号では、ひとりの若者が煙管を通じて出会った燕の職人魂と人とのつながり、その先に描く未来への挑戦を紹介していきます。



いわなみ りく 岩浪 陸さん
ろくばりきせる 六張煙管

1995 年埼玉県生まれ。東海大学、大学院で考古学を専攻。卒業後の 2020 年 4 月から独学で煙管を学び、制作を開始。同年 10 月「六張煙管」を開業し、2021 年に燕市に移住。趣味は煙管集め。



【学生時代】考古学を専攻していた岩浪さん▲

※燕市出身の実業家・丸山清次郎さんが収集した日本有数の煙管一大コレクション

煙管の作り手として埼玉県から燕市に移住してきた若者がいます。「六張煙管」の岩浪さんです。

岩浪さんが最初に煙管と出会ったのは、大学時代。「人と違うことをしたい」という思いがきっかけでした。最初に偶然手にしたのは、燕市の煙管職人である飯塚昇さんの作品。実用性と芸術性を兼ね備えた作品に魅了され、煙管の文化や歴史的背景に興味を持つようになりました。

その後、考古学の専門的な知識を深めるために大学院へ進学。卒業前に、北陸地方の博物館を巡っていたときに訪れたのが燕市産業史料館でした。そこで、「丸山コレクション」の煙管に感動し、製造工

程の模型を目にしたときに、「自分でも作ってみたい」と思い挑戦を始めます。

卒業後の 2020 年 4 月から、煙管制作を始めた岩浪さん。YouTube や骨董品を頼りに独学で制作を開始し、試行錯誤を重ね、手先が器用だったことから、夏頃には初めて販売できる製品を作り上げるまでになりました。

同年 12 月、SNS で知り合った人の紹介で、燕市に本店がある玉川堂の銀座店を訪ね、番頭の山田立さんに出会ったことが燕市への移住の大きなきっかけとなります。地域の温かい受け入れや市の移住担当者のサポートもあり、翌 2021 年に燕市への移住を決断しました。



▲工房で煙管づくりを行う飯塚さん

▶左：ロンドンでの実演の様子
右：産業史料館に展示してある飯塚さんの作品



※外務省による取り組みとして、イギリス・ロンドンに設置された欧州向けの日本文化の対外発信拠点

燕に生きた煙管職人・飯塚昇さん

若い移住者が影響を受けた、

飯塚昇さんは1934年、燕市生まれ。父の背中を追って中学卒業後、煙管作りの道へ進みました。1970年頃に一度転業。その後、60歳で「させる屋のぼる」を開業し、再び煙管職人として歩み始めます。2012年には「にいがた県央マイスター」に認定。展示会への出展にも積極的で、2018年にはロンドンにある「ジャパン・ハウス ロンドン」で煙管作りを実演。外国人に燕のもののづくりの成り立ちや職人の姿勢を伝え、現地の人から、熱心な質問を受ける場面もありました。

2025年1月、90歳で逝去。生涯を通じて燕の煙管産業を支え続けた、煙管を専業とした燕市出身の最後の職人です。

出会いがつなぐ、新しい物語

岩浪さんが、燕市への移住を決断した背景はものづくりの歴史や技術だけではなく、燕で出会った人たちの人柄や出来事が、このまちで“ものづくり”に挑戦しようという気持ちを後押ししました。

interview

「初めまして」で、プロポーズ。独学の若者に「燕で挑戦してみない？」

2020年12月、玉川堂の銀座店に「埼玉で煙管を作っている若者がいる」とお客さんから紹介を受け、岩浪さんが作品を持参して訪れました。山田さんは当初、販売の相談かと思っていたそうですが、目の前に差し出された作品を見て驚きます。

「よくできているな、と思いました。どうやって作ったのか聞いたら、YouTubeを見ながら独学で作ったと。『このままどうするの？』と聞いたら、特に考えていないと言う。これはもったいないと思いました」

そのとき山田さんの頭に浮



移住のキーパーソン
株式会社玉川堂
やまだりつ
山田立さん

「岩浪さんの作品を委託販売で終わらせるのは簡単。でも燕に来てくれれば、燕の煙管を未来につなげることができると。岩浪さんにとっても、飯塚さんに習ったと胸を張って言える方がいい。思わず『燕に来て、本気でやってみませんか？』と伝えていました」

思いがけない提案は、まるで初めて会った日にプロポーズしたような感じが、たと山田さんは笑います。

その後、市の移住サポートもあり、岩浪さんは2021年9月に燕へ移住。わずか1年足らずの出来事でした。

移住後、岩浪さんは飯塚さんから基礎を学び、確かな技術を身につけていきました。

今では、玉川堂の彫金師とコラボレーションした作品を手がけ、銀座で開催された煙管展にも出品するなど活躍の場を広げています。



▲玉川堂とコラボレーションした岩浪さんの作品

「煙管や鉋起銅器に限らず、このまちに伝わる技術や先人の思いをとにかく次の世代に残したいのです。岩浪さんが来てからは、道具や場所など初期投資なしでも参画できる枠組みをつくらなければと強く思いました。個人的に取り組んでいる人もいますが、業界の仕組みとして必要かなと思います」

消えつつあった燕の煙管産業にとって大きな転機となった二人の出会い。山田さんの提案の裏には、燕に昔から受け継がれてきた技術を未来につなぎ、伝統と最先端の技術が融合・共存することで、ものづくりの幅を広げ、燕を他には真似できない「ものづくりのまち」にしたいという想いがありました。

岩浪さんと出会った地元民の

声

移住担当者

■移住支援をサポート

玉川堂の山田さんから「面白い子がいる」と紹介され、初めてお会いしたときは、おとなしく真面目な好青年という印象でした。

地域振興課在籍時には、移住体験ツアーのアテンドや、都内・オンラインでの移住相談、煙管制作に適した住まい探しなどをサポートしました。燕市でぜひ煙管制作を続けてほしいという思いとともに、地域に自然と溶け込み、人とのつながりを広げながら、生活やビジネスが順調に進むよう意識して支援してきました。

移住後は、移住者交流会として岩浪さん宅で煙管の解説会を開催したことや、NHKの移住者紹介番組の取材を受けたことが、特に印象に残っています。



燕市の移住関連の事業の詳細はこちら▶



燕市社会福祉課（元地域振興課）
いたばし ようすけ
板橋 洋祐

煙管愛用者

■地元の文化を改めて学んだ

岩浪さんとの出会いは、イベントがきっかけでした。直接お会いして話をしてみても、それまで私は、煙管を「道具」としてしか見ていませんでしたが、彼と出会ったことで文化や歴史に興味を持ち、自分なりに背景を調べるようになりました。燕の煙管の歴史の中で、研磨やプレスといった技術を通じて大量生産へと移行した部分に、燕らしさを感じます。その積み重ねが今のものづくりにつながっているんだと思います。

私自身ものづくりに携わっていますが、新しいものを作っていく中で、「こうしなければならない」という形はありません。プロセスは多様であっていい。煙管にとどまらず、燕のもののづくりを未来につなげていくためには、若い世代の感性や視点が欠かせないと思います。

株式会社中央製作所（燕市）
かねこ りょういち
金子 龍一さん



燕で感じる、技術と人の魅力

歴史の中で培われた技術と、移住者を迎え入れる人の温かさ。この二つの魅力に惹かれ、燕で新しい挑戦を続けている岩浪さん。燕は、若者にとって新しい一步を踏み出しやすい環境だったと語ります。

過去を学び、遊びを加えて、未来を生む

デザイン性や歴史的背景に触れるたび、煙管の奥深さに魅了されていた岩浪さん。岩浪さんが制作において大切にしているのは、昔ながらの形を尊重しながらも、その中に「遊び」を加えることです。過去に職人が取り入れたアイデアを組み合わせながら、自分らしい要素を加えた新しい表現に挑戦しています。ものづくりとは、過去を守り抜くだけでなく、過去を学び、見つめ直しながら、次のかたちへと進化させる営み。ゼロから生まれる完全な新しさは限りなく少なく、時代ごとに受け継がれた「モノ・コト」の上に積み重なっていくものです。

飯塚さんは、岩浪さんが抱く技術を受け継ぐ「職人」のイメージをいい意味で覆しました。例えば、既存の道具を

仲間と広がるものづくりの日々

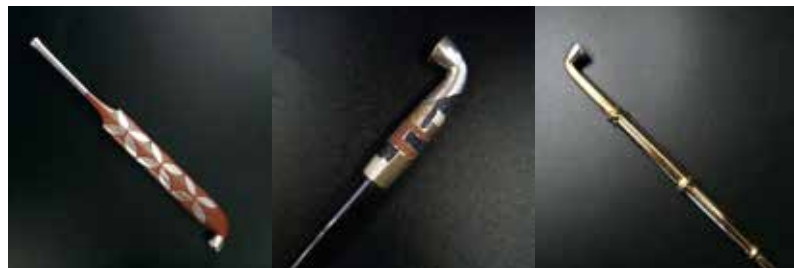
「最初はYouTubeや既存の煙管を手本に独学で学びましたが、移住後は人との出会いが学びの大きな糧になりました。技術以外の部分で学びが多いのも燕ならではの感覚です」

燕市はこれまでの歴史において、技術や文化、そして人を積極的に受け入れ、発展してきた地域です。その精神は現在でも脈々と受け継がれ、外からやってくる人々や新たな「モノ・コト」を温かく迎え入れる風土が自然と根付いています。

岩浪さんは、玉川堂の紹介で知り合った若手職人たちの交流を通じて、技術的なアドバイスを受けたり、ものづくり以外の分野でも刺激を受けたりしています。移住した当初は、誰も知らない土地で不安を感じることもあったと振り返ります。しかし今では、このまちで築いた人間関係が、制作環境だけでなく生活そのものの心地よさにつながっています。

改造し、より効率的で使いやすい物へと工夫したり、高齢でありながらも、手描きの図面ではなく、パソコンを用いた図面作成を取り入れてデザインしたりするなど常に時代に合わせてアップデートしています。岩浪さんは、その姿勢に触れ「伝統とは新しい挑戦の積み重ね」だと強く感じたと言います。独学で煙管制作を始めた岩浪さんにとって、飯塚さんとの出会いは、大きな学びとなりました。燕のものづくりの歴史を紐解くと、飯塚さんが示していた「常に工夫し、新しい挑戦を重ねる」姿勢が、このまちのものづくりの発展と強く結びついていることがわかります。

▼岩浪さんの作品



市が主催した移住者交流会
写真中央：岩浪さん

◀玉川堂の職人との
交流会の様子



株式会社玉川堂
しろとり
白鳥 みのりさん

い発見や挑戦が生まれていく。その循環こそが、このまちのものづくりを面白くしていると感じています。



仲間の声

■仲間と交わり、広がる視点

燕に煙管という少し特殊な分野で新たに飛び込んできた人が加わったのは、とても新鮮な出来事でした。銅器と煙管は似ているようで、実は違いが多いです。これまで玉川堂では、煙管展を企画していましたが、岩浪さんと話をするなかで、県外の金工の知識や視点を聞けるようになり、「なるほど」と思う場面が増えました。

また、職人同士の交流会は、技術的な刺激だけでなく、お互いの価値観やモノの見方を交換する場にもなっています。コミュニティが広がっていくことで、新し

interview

燕の煙管産業を見つめて

日本たばこアイメックス株式会社（東京都）

井坂 恭子さん

2014年の飯塚さんとの出会いから、岩浪さんが技術を受け継ぐ現在に至るまで、燕の煙管に関わり続けている井坂さん。以来約10年、喫煙具の企画やミュージアムショップの運営を通じて、煙管の価値を「実用品」と「工芸品」の両面から見つめてきた専門家の目に、燕の魅力はどう映っているのでしょうか。



燕ならではの特徵

初めて燕の煙管を手にしたとき、まだ手作業で作られている職人がいる事実に驚きました。飯塚さんは銀煙管を30本単位で同じ品質に仕上げます。その根気と精度は、ほかに類を見ないものでした。そのおかげで、多くの人に手仕事の煙管を届けることができたのだと思います。

燕のものづくりには、依頼されたものをただ形にするのではなく、その先の「より良いもの」を追求してくれる懐の深さがあります。指示以上の工夫を惜しまない柔軟さと探究心は、他の地域には見られない燕ならではの特徵です。

飯塚さんの技と人柄、岩浪さんへの期待とは

飯塚さんの姿は今も鮮明です。展示会の打ち上げで歩く速さに追いつけなかったことや、海外へ招かれるほど精神的に活動されていたこと。技

術も人柄もよく、多くの人に慕われていました。依頼側の思いを受け止め、コストを含めて最良の形を探る姿勢は、まさに職人の鑑でした。

現在、燕で煙管の制作を手がける若手の岩浪さんには大きな可能性を感じます。繊細な手仕事で古典の美を再現するだけでなく、SNSを通じて自ら発信する力を持っている。伝統と新しさの両方で、これからの燕を牽引する存在だと期待しています。

変わり続けるからこそ受け継がれる

燕の煙管の価値は、道具としての実用性と工芸品としての美しさを兼ね備えている点にあります。完全な手仕事で作られる煙管は今や希少であり、その造りは文化財にも匹敵するものです。

私にとって継承とは、同じものを繰り返すことではなく、時代に合わせて変容しながら続いていくことです。燕の金属加工が和釘から煙管、そして金属洋食器へと形を変えてきたように、変わりながら続く力こそがこの土地の最大の強みだと思います。

燕のもののづくりを知る 見て、触れて、体感して ——



おすすめスポット・イベント

- 産業史料館（燕市大曲 4330-1）
- 燕三条 工場の祭典

燕市で農家の副業から始まった和釘づくりの技術は、金属洋食器をはじめ、さまざまな製品を生み出す技術へと進化し、世界に誇る「ものづくりのまち・燕」を形成しました。燕市には、昔ながらの技術と最先端の技術が融合・共存し、ものづくりの幅を広げることで競争力を高めてきた歴史があります。こうした歴史や魅力を市内外の人に知ってもらうことは、市民のまちに対する誇りや愛着を育み、「ものづくりってかっこいい」「携わってみたい」と思う人を増やし、未来へとつなげていく大切なきっかけとなります。実際に燕のものをづくりを“見て、触れて、体感できる”場である、産業史料館や10月2日(木)～5日(日)に開催される『燕三条 工場の祭典』に訪問し、このまちが育んできたものづくりを、ぜひ現地で体感してください。



燕市産業史料館

TSUBAME INDUSTRIAL MUSEUM

■開館時間
9:00～16:30（体験受付は閉館の30分前まで）

■休館日
月曜日（祝日の場合は翌平日）、年末年始

■入館料
大人 400 円、小・中学生、高校生 100 円
団体（10人以上）/ 大人 300 円、小・中学生、高校生 80 円
年間パスポート / 大人 2,000 円、小・中学生、高校生 500 円

■音声ガイド
館内（企画展を除く）の音声ガイドを無料貸出しております。
日本語、英語、中国語に対応しており、入館時に受付にてお申し込みください。（音声ガイド台数 27 台）

■問合せ ホームページはこちら▶
☎ 63・7666 / FAX 63・7669



開催地／新潟県燕三条地域と隣接市町村の企業、飲食店、道の駅など約133カ所で開催

2025 10.2 - 5

燕三条 工場の祭典 2025

燕三条のものづくりは、技術にとどまらない。
心に触れ、五感を震わせる力がある。
見えない感情が風となって流れ出すその瞬間を体感しよう！

詳細はこちら▶



Discordで繋がろう！
工場の祭典Discordではみんなのオススメ工場、グルメ、宿泊情報が日々更新されています！

工場の祭典



Instagramを通じて、作品やイベントの告知、販売を行っています▼



Instagram: riku_iwanami
岩浪 陸【六張煙管（ロクバリキセル）】
118 投稿 1,367 フォロワー 567 フォロー中

2020年より煙管制作に着手。煙管張師。#六張煙管の屋号で制作、販売しています。お問い合わせはDMより承っております。
thebase.in/to_app?s=shop&... 他3件

YouTubeの配信はこちら▼



歴史と未来をつなぐ挑戦

燕で見つけた自分らしい生き方。煙管を通じて歴史と未来をつなぎながら、これからも挑戦を続けていく岩浪さんのこれからの展望とは。

伝統は自由で面白い

400年続く燕のものづくり。その歴史の流れの中で、岩浪さんは自分自身を、伝統を「守る人」というより「今の感性でつなぐ人」だと考えています。伝統とは固定されたものではなく、時代ごとの変化に合わせて形を変えながら生き続けるもの。だからこそ、もっと自由に、もっと面白く挑戦できるのです。そして、その姿勢が、同世代や次世代の若者へと受け継がれていくのです。

SNSから世界へ

活動の初期からInstagramで作品を発信してきた岩浪さん。そこから販売につながったり、玉川堂との出会いに発展したりと、SNSはさまざまなきっかけを生んでいます。現在もSNSでオーダーメイドの受付や制作風景の発信を続けており、国内に限らず海外からの反応もあります。

岩浪さんは今後の展開として、グローバルな視点も意識した、世界に通用する新しい作品づくりに挑戦するため、鍛金技術をはじめとする燕の多様な技術を学び、表現の幅をさらに広げていきたいと考えています。

また、煙管を「喫煙具」としてだけでなく、「文化」として広めていくことも目標としています。そのために、考古学で学んだ知識も活かしながら、歴史や文化的背景を整理し、ウェブ記事やYouTube動画といったコンテンツを通じて、若い世代への発信にも力を入れています。